

平成二十六年・久女忌に思う

早稲田大学環境総合研究センター

石 太郎

■久女忌に思う母への気持ち

平成二十六年一月二十一日、今年も久女忌が北九州市の圓通寺で行われ、これに参加することができた。私は平成十九年より久女忌に参加するようになって、早くも七年になる。今年も一月二十一日は小雪が心配される寒い朝であった。終戦間もない昭和二十一年のこのような時になくなったことを思うと久女も杉田宇内も大変だったことであろうと、当時の気候にも思いが馳せる。

今年も圓通寺のご配慮で、久女忌はお寺の御堂の中で行われた。約五十人ほどそれぞれの思いで参加された俳句に親しむ方々の落ち着いた雰囲気は漂っていた。久女忌の内容は久女・多佳子の会の杉田久女ホームページ (<http://www.hisajo.jp/>) に詳細が報告されている。今年は例年と違ってさまざまな思いが去来する久女忌の時間の中にいたので、それについて述べてみたい。

なぜ例年とは違っていたのか。その背景の一つは、昨年末に

我々家族が愛知県の実開先から東京に出てきた家との別れである。家の処分であるがそれは母や父が生きた足跡の整理であり最後に家の取り壊しという区切りをつけたことである。特に母は、ここで久女復活の仕事に生涯を費やし、膨大な原稿、書物、資料等が残っていた。それらは精神的に重荷となる作業であるが、整理は母との最後の別れのように孤独でとても寂しいものであった。多くのものは私が知っているものや、知らないもの等雑多であるが、一つ一つ懐かしんでいると時間がすぐ経ってしまう。なかなか仕事が進まなかった。一人の人生の区切りを感じ、感傷的になってしまっても切ない時間である。死後の足跡とは何であろうか。物で個人を強く感じるのは家族であるが、精神的なものは他の人々の心にも宿りそれがまた他の人に波及して行く。杉田久女についても、母の努力もあって人々の心に伝わって行く。整理しながら小倉のことを思い、そして小倉に来て母のことを思い出した。この場に母がいたら、どのように感じるだろうか。

膨大な原稿の下書きを見るとその瞬間々々の母の心の葛藤が改めて伝わってくる。気持ちを活字に著すことは覚悟のことだ。その葛藤が何回も書き直した筆跡に忍ばれる。母が最後にたどりついたように、心の緊張を解き放して世の中を見た時に、支える人々の心も見えてきたのではないであろうか。その解き放つ力は圓通寺林文照和尚の論しの言葉であり、時間の経過であり、久女の俳句に親しむ人々の心の力であった。時代も変わり将来に向けてどのように役立たせるのかを考え、こ

のような生き方から自分の人生について考えることが必要だと感じていた。

母がいつも小倉のつらい気持ちを言っていたのが耳に残っている。少し長くなるが、葛藤の中で生きてきた母の気持ちの深層をたどってみよう。

■母の気持ちの回想

久女忌の進行している時間、母の北九州への感情が思い出された。しばしば母の記述から回想してみる。

昭和三十七年五月に父は亡くなった。

父と母を公平に見て、自分を自分なりに納得すればよいと思いつながらぬ、父に對し言い争いはしなかったが、何時も厳しい批判の心を抱いていた。(中略)

淋しい山の中に、心を寄せ合うこともなく、母が死に父が死に、今度は自分の番が何時来ても不思議でなくなってきた。時が経つてみて私どもの家は理屈なく一つの運命の中で生きて来た。

今はその古い家屋敷も解体して無くなった。父の希望通り父をここで送ることが出来たということだけが私の救いとなった。(石昌子個人誌「うつぎ」十三号、昭和六十一年十二月二十日発行、父の死より)

良い環境に育つた運の良い人は、すくすくと人生をうまく乗り切れるだろうが、久女の場合、不自然な環境に置かれ、その

一生は何一つ、生きる努力に對し悔りがなかった。「死んでからでもいいから句集を出して欲しい」と、私に頼んだ最後の言葉を忘れることができない。

久女は、

言葉少なく別れし夫婦秋の宵

と、夫の事を詠んでいる。小倉の生活を今振り返って見ると、目に見えぬ鎖に繋がれて、気持ちのゆたかな自由がかなったような気がする。(中略)

小倉の俳人達の久女観は非常に厳しく、それがさらに尾鰭をつけ、一から十まで、久女を悪く解さねば済まない扱いだ。今となつては次元のちがう人々の餌食になつたとしかかない無念この上もないことと思う。

魂の自由は芸術の根本である。俳句にも魂の自由はあると考へ、私は俳句を常識、常識で割り切つて考えたくはないのである。(石昌子個人誌「うつぎ」二十三号、平成二年七月二十五日発行、久女句解より)

一月二十一日は久女の忌日に當る。本年は五十周年忌である、郷里の菩提寺教聖寺、また永代供養寺の高野山普賢院からもその御知らせがあつた。其処へ北九州市小倉区の禪寺圓通寺出身の林文照和尚から、圓通寺に於いて五十回忌の法要を営み度いから、当日出席されたいと招請があつた。

母との思い出は小倉にしかなく、その中で圓通寺は久女にも私にも固縁浅からぬ寺である。文照和尚の先代は広寿山寺の住

職隆照氏であるが、父は学校の関係、母は俳句で昵懇にしていた。…(中略)

小倉で葬式が出せなかつた私の心に刺さり続けたのだ。

しかし今怨を忘れなさいと諭され、何が私の怨みかと思うと、全て自分の無力に返ってくるのでそのことがやりきれない。

無力なくせに自我が強くと、本当には父も母にも心服はしていなかった。女の子として二人から拘束されている気がし、自分が分からないままに、小倉の環境から絶えず逃れたいと考えていた。逃れ得るところか、小倉は怨念の地として残った。(石昌子「いのち曼荼羅」平成八年七月二十日発行収録、久女五十周忌、文は平成七年のもの)

圓通寺の林文照和尚から「互いに限りある生、貴方も怨みを捨てなさい」(石昌子「私の五十年」十三号、平成十年十月一日)と説かれその後母の気持ちと和らぐきっかけとなつていったのである。

■久女忌の中に浸つて

このように振り返つてくると今日の久女忌は、まさに生まれ変わったものであると思う。今日は、俳句に親しみ、俳句を愛する方々が集い、それぞれの立場で俳句に親しむ場となつていゝ。現代では、誰でも自分で俳句に取り組めるものとなつた。北九州市では、このような縁により、それぞれの精神文化の醸成に久女俳句が貢献する事となつていゝ。過去にどのような

ことがあつたにせよ、時代が過ぎて時が流れ人々の心の中で精神文化が育つて行く。今日では、誰でも俳句に親しむことが出来、句集も久女の時代のような厳しさはない。句作を通して自分を見つめて、自分の考え方、思想、人生観をしっかりと持ち生きたり仲間との交流に生きがいを見出す。俳句への努力により自分の生き方が自覚できることになる。

今年の久女忌では、柿本会長のお話はとても心がこもつていて心に沁みだ。とても平易な言葉の中に柿本会長の暖かさや年輪の味を感じることができ、このような話し方をしてみたいものだと感じつつ心地よく聞いた。

また北橋市長のお話もよかつた。圓通寺堂内で聞く市長の言葉はとても身近で、お話で市長の人間性が感じられてやはり心に沁みるものであつた。

今年の久女忌には、この他に世良議員、「青嶺」主宰の岸原清行先生、俳句誌「雉」編集長の鈴木厚子氏、北九州市立文学館の今川英子館長等多くの重鎮が参加された。北九州の文化が詰まつた幅の広い交流の時間であつた。そしてこれからの時代の予感を感じるのには、若い方も参加されている事である。若い方の参加で過去にとらわれない新しい時代を予感させ、そこから北九州市、あるいは日本の将来につながる希望が感じられた。

(以下次号へ続く)

平成二十六年・久女忌に思う

早稲田大学環境総合研究センター

石 太郎

(前六月号より続く)

■北九州市立文学館の静寂に身をおいて

このように北九州市には、杉田久女や杉田宇内、母が生きた生活が詰まっている。ここに来ることは母と一緒にいるようで、とても親近感がある。様々なご縁により今日があることは、私にとつてかけがえのない時間であり久女や母からの贈り物のように思う。土地の気風、人々の気持ちを育てる風土、人情、生き方等々多くのことが巡る。北九州市には、多くの文化がありそれを学ぶことのできる街である。文化の発信基地としての北九州市立文学館の意義は大きい。いつも久女忌に来て北九州市立文学館を訪ねるようにしているが、その静寂の中に身をおくと文化の中に浸ることができ至福の時間となる。

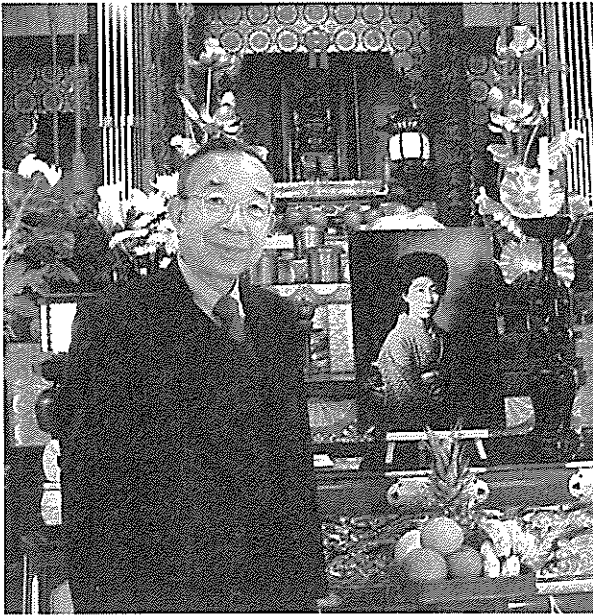
■北九州市立美術館の四季桜を訪ねて

このような気持ちの中、今回思い立って北九州市立美術館を訪ねた。ここに杉田宇内の自画像があるのと、母が宇内の思い出もあって、当時の谷伍平館長に四季桜の苗木を寄贈し植えていただいたことがあるからだ。私も谷伍平館長の時代に、母と一緒に美術館を訪ねたことがある。

私が今回訪問したその日は雨模様で、行き方を間違えてふもとから美術館の建つ頂上まで林の道を登ることとなった。新緑のところであればすばらしい木陰道であろうが、冬の雨の日にとほと薄暗い坂道を登る人は誰もいなかった。湿った坂道を登るのは膝の調子が悪い私には少々つらかった。しかし気持ち美術館への思いを体に刻みこむようで悪くはなかった。

ようやく美術館の建物が見えてきてほっとする。皆が話していた四季桜は美術館の右の坂道の袖に育つていてすぐわかった。この桜は小原の四季桜として後に村おこしとして植樹したものである。時が経って北九州の四季桜も立派な幹に育つていて、今更ながら木の成長力、時の流れの長さを感じしばし時間を忘れた。

母はよく苗木や実生を植えることが多かった。私は若い時で小さな木のゆっくりとした成長のスピードを理解できなかった



小倉北区「圓通寺」久女忌（平成 26 年 1 月 21 日）

た。年をとってくると木の成長力も理解でき、木の成長する時の流れと風雪に耐えて育つ木のエネルギーに感銘する。いつの間にか大きな木に成長してしまふ、植物の生命力に感動する。美術館に立派に育っている四季桜に向かい合い様々な思いに浸った。四季桜の根元には杉田宇内の出身の小原に緑のある木であることが素朴に説明されている。桜と言っても四季桜の花

は小さく冬の寒い時期に咲く寒桜、または冬桜として淋しい雰囲気だ。木は人の思いを込めて成長する。この四季桜にこめられた母の思いをしばし思い出して佇んだ。

昨年手放した東京の家の庭に小原の杉田家から持って来た蜂屋柿の木も、家の処分とともに切られて無くなった。その木も母が小原から苗木を持って来たものである。私はその木の幹の模様、秋の柿紅葉の葉の色が好きでいつもそれを眺めていた。柿の実も大層立派な実で、庄屋門のそばに生えていた蜂屋柿の木を見て育った子供の頃をいつも思い出していた。東京の庭のその木も今は切られてなくなった。美術館の四季桜を眺めていると、母の気持ちや育っているようでいとおしく思いなかなかそこを離れられなかった。

結局、自画像は倉庫に保存されているということで対面出来なかったが四季桜に会うことが出来て、苦勞して登って来た甲斐があった。因みに母の送った四季桜は妙見山荘にも植わっており、立派な木に育っている。

久女忌開催にご努力いただいた関係者の皆さまに心から感謝いたしたい。また、今年の久女忌では岸原主宰にお会いできた。元気に活躍されておられこちらでも頑張らねばという気持ちをお願いしたい。背嶺のますますの発展を祈念したい。